

## 平成5年度会員の学会発表抄録

第10回医学情報サービス研究大会 (1993. 6. 19~6. 20)

### 患者図書サービスとMRSA院内感染

京都南病院図書室 山室 真知子  
高山赤十字病院図書室 木下 久美子

京都南病院において患者図書サービスを開始したのは比較的早い時期で、その当時は患者に貸出した本から病気が感染するのではないかとの危惧が多くの人々に抱かれていた。しかし最近ではその疑いもやや解消の兆しが見られるようになり、多くの病院で院内職員やボランティア、または公共図書館が病院へ出向いての図書の患者サービスが増えてきており、この活動を行っている病院もしくは人々の交流が望まれるまでになった。

しかし、昨年来の病院におけるMRSA(メチシリン耐性黄色ブドウ球菌)感染が大きく報道され社会的な問題になってきて以来、これまでとは逆な立場からの感染、つまり図書サービスは抵抗力が弱っている患者への感染に影響を及ぼさぬかとの質問や問い合わせが頻繁になった。とくに公共図書館や院外のボランティアの人々にとってはこの院内感染が原因となって患者図書サービスが中断されぬかとの心配と、何か感染予防対策があるならば…ということの問題となったようである。われわれは、本を媒介としてのMRSA感染はまず考えられないとして従来通りのサービスをつづけていたが、この院内感染が正しく理解されぬままに、ようやく拡がりかけた患者サービスがここで後退もしくは中断されてはならないと考え、その安全性を確認してみることにした。

まず、京都南病院では院内に設置されている「院内感染防止対策委員会」に、患者への図書サービスにおけるMRSA感染の安全性

について検討を依頼した。その結果は予想通り、次の通りであった。

1. 図書室に入室できる軽症患者には、感染の心配はない。
2. 菌が本に付着しての感染はMRSAに限らず、考えられない。
3. 細菌感染予防が必要とされるIVHを受けている患者でも、主治医の許可を受けて行動しているので心配はない。

また、図書委員長の強い要請により、環境の安全性を確認するために図書室内の落下菌およびサービスに携わる司書の保持菌の検査も行ったが、いずれも陰性であった。しかし今後もこの検査を何度か行いながら、①「院内感染防止対策委員会」を中心に安全性についての検討を続けていく、②付添いの人を介して本の貸出しをする場合には患者の病状に留意する、③ベッドサービスはこれまで通り行わない、④発病した患者から返却された本は、他の感染症の場合と同様の処理する、⑤美観を損なった本は書架から外す、等を実行していくことになった。

高山赤十字病院においてはこれまで通り本の紫外線消毒を行うと同時に、図書室の入口に手指の消毒器を設置した。また各本に「読書の前後に手をあらいましょう」のシールを貼付して清潔を呼びかけている。

わが国における患者図書サービスの遅れは、病菌の感染について正しく理解されていなかったことが大きな原因の一つであったと思う。今後、当然関わって行かねばならないであろうエイズ患者へのサービスをも含めて、常に医学的な正しい理解と衛生管理を考慮しながら、患者のための図書サービスが続けられることを願っている。

## 病院図書室ネットワークの課題

星ヶ丘厚生年金病院図書室 首藤 佳子

現在形成されている病院図書室ネットワークはその成り立ち、組織形態に差異はあるものの、主たる機能は1.文献流通網、2.担当者の研修・教育、3.担当者の交流・情報交換である。以下、現行ネットワークの意義と課題、その将来について考えてみたい。

## 1. 病院図書室ネットワークの意義と課題

現行ネットワーク機能のうち文献流通網としての機能がもっとも重要である。大規模な学術情報システムから漏れた病院図書室の文献流通の便宜を図る見近なネットワークとして、小規模ながら実状に即してより簡便に迅速に安価に文献の相互貸借が行われている。

しかし、条件整備の遅れている病院図書室がネットワーク活動を行うには多くの課題がある。資料の充実と整理・保存、人員や機器を含めた業務体制の整備と改善など基本的な図書館機能の整備とともに料金授受体制の整備、著作権の問題等が差し迫って解決されなければならない。また、ネットワークが拡大し、その活動が盛んになるにつれて各図書室の業務量の増加や依頼の集中と分散をどう考えるかなどの問題が起きてくるであろう。

これらのハードルを一挙に乗り越えるのは難しく、まず何よりも管理者が病院における研究学術活動をどう考えるか、ニーズをどう捉えるか、それをサポートする図書室の機能をどう評価するか、ネットワークの必要性を認めるか否かが問われる。もっとも難しいのはニーズの捉え方であろう。特に製薬会社の文献サービスに依存してきた病院でのそれは難しい。制度的な裏付けの乏しい病院図書室では整備に先立ちこれらのニーズの把握と評価が改めてなされるべきである。また、ネットワーク活動をスムーズに行うにはその成員がこれに対して共通の認識を持っているか、ネットワークへの依存によって図書室が空洞化することがないか等についても注意が払わ

れるべきである。

## 2. 病院図書室ネットワークの将来

現在、情報環境がめざましい速度で整備されている。学術情報センターのMACSIS-ILLが稼働を始め、各種情報機関もそのサービスを強化してきている。このような中でネットワークの将来をどう展望するかはもっとも肝要な課題である。病院図書室にとってもっとも望ましいのはGive and Takeの義務がない、会員制の枠のない文献流通システムである。しかし、現状では図書室(館)間相互協力の範囲内で、現存のネットワークをより合理的に改善すること、ネットワーク間の連携を図ることが必要と考える。さらには大きな学術情報網にどう関わるかについても論議されることが望ましい。

文献流通網と職能団体的な活動は本来分けて考えるべき性質のものである。ネットワークの整備とともに病院図書室固有の問題解決のための機関、活動が模索されるべきである。

## お詫びと訂正

本誌14巻1号の記事に誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

1. <Faxによる文献申込に関するアンケート調査について> p. 10
  - ・東京慈恵会医科大学付属図書館
  - △「あらかじめ電話連絡を」→○
  - あらかじめ電話連絡が必要なのは現物コピーの場合で複写申込は無条件でFax使用が可能です。
2. <新入会員紹介> p. 49
  - ・姫路聖マリア病院の住所
  - 姫路市豊野(誤) → 姫路市仁豊野
  - 650番地(正)